

業務実施報告書

JICA 国際協力中学生・高校生
エッセイコンテスト 2016

2017年3月

JICA 広報室地球ひろば推進課

目次

JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト 2016

I. 事業概要および実績

- 1 応募数実績 P. 1
- 2 受賞者数実績 P. 1
- 3 審査員、後援・協賛団体一覧 P. 2
- 4 海外研修実績 P. 3
- 5 その他イベント等実績 P. 4

II. 評価

- 1 募集テーマについて P. 5
- 2 応募総数と応募者内訳について P. 5
- 3 周知について P. 8

JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト 2016

I 事業概要および実績

独立行政法人国際協力機構（以下、JICA）は、次の世代を担う中学生・高校生を対象に、開発途上国のおかれた現状や開発途上国と日本との関係について理解を深め、国際社会の中で日本、そして自分たち一人ひとりがどのように行動するべきか、「考えるきっかけ」を提供する事業として、「JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト（以下、エッセイコンテスト）」を実施している。

事業の内容としては、全国の中学生・高校生を対象に、夏期休業の時期に国際協力を題材としたエッセイ（中学生の部：1200 字、高校生の部：1600 字）を募集し、JICA 内外の審査を経て、優秀作品を決定、表彰するというもの。そのうち、最優秀賞、優秀賞、審査員特別賞を受賞した生徒には、翌年の夏期休暇中に約 1 週間の開発途上地域における「海外研修」が提供される。

本事業は JICA の前身である「海外移住事業団」が「海外懸賞作文コンクール」として、1962 年に開始して以来毎年度実施しているものであり、2016 年度で中学生の部は 21 回、高校生の部は 55 回を迎えた。

今年度の作品応募数は、80,814 作品（中学生の部 50,727 作品、高校生の部 30,087 作品）であった。また、昨年度コンテストの最優秀賞、優秀賞、審査員特別賞受賞生徒を対象とした海外研修を実施し、マレーシア（中学生の部）、ベトナム（高校生の部）に計 24 名（同行者 2 名、添乗員 2 名を含む）を派遣した。

I-1 応募数実績

今年度の応募総数は 80,814 作品で、昨年度より 11,059 作品増加した。校種別に見ると、中学生の部が 50,727 作品（昨年度比 126.4%）、高校生の部は 30,087 作品（昨年度比 101.5%）となり、どちらも増加した。また、学校応募件数は、中学校の部は 1,167 校（昨年度比 98.0%）、高校の部は 380 校（昨年度比 96.2%）とどちらも微減した。

【図表 I-1 エッセイコンテスト応募総数年度別推移】

	2016	2015	2014
中学生の部	50,727 作品 (1,167 校)	40,119 作品 (1,190 校)	37,669 作品 (1,157 校)
高校生の部	30,087 作品 (380 校)	29,636 作品 (395 校)	28,793 作品 (384 校)
合計	80,814 作品 (1,547 校)	69,755 作品 (1,585 校)	66,462 作品 (1,541 校)

※ カッコ内は学校応募校数

I-2 受賞者数実績

応募総数 80,814 作品のうち、431 名（中学生の部 246 名、高校生の部 185 名）が受賞した。また、応募校数 1,547 校のうち、486 校（中学生の部 341 校、高校生の部 145 校）が学校賞または特別学校賞を受賞した。

応募総数に対する受賞者数の割合(以下、受賞率)は0.53%であり、昨年度(0.58%)と比べ微減した。また、学校賞、特別学校賞の受賞率は約31%であり、昨年度(約24%)と比べ増加した。他方、学校別に見ると、中学生の部の学校賞は昨年度と比べ98校増加し、1校あたりの応募者数が増加したことが分かる。

【図表 I-2 エッセイコンテスト年度別受賞者(校)数推移】

	2016		2015		2014	
【中学生の部】						
最優秀賞	2名		3名		3名	
優秀賞	2名		3名		3名	
審査員特別賞	4名		4名		4名	
国際協力特別賞	10名		10名		10名	
国内機関長賞	42名	合計	47名	合計	43名	合計
佳作	120名	162名	94名	141名	86名	129名
OB会会長賞	66名		51名		73名	
学校賞	293校		195校		180校	
特別学校賞	48校		40校		45校	
【高校生部】						
最優秀賞	3名		3名		3名	
優秀賞	3名		3名		3名	
審査員特別賞	4名		4名		4名	
国際協力特別賞	10名		9名		10名	
国内機関長賞	38名	合計	44名	合計	42名	合計
佳作	59名	97名	53名	97名	51名	93名
OB会会長賞	68名		83名		74名	
学校賞	108校		111校		99校	
特別学校賞	37校		36校		38校	

I-3 審査員、後援・協賛団体一覧

今年度の審査員、後援・協賛団体は以下のとおり。

【中学生の部】(敬称略)

氏名(敬称略)	所属
尾木 直樹 (審査員長)	教育評論家/法政大学教職課程センター長・教授
榎本 智司	全日本中学校長会 会長
黒井 崇雄	読売新聞東京本社 編集局生活部 部長
塚越 保祐	世界銀行 駐日特別代表
中野 知明	日本航空株式会社 本店 顧客販売部 部長
澁谷 晃	JICA 国内事業部 中小企業支援事業課 課長

【高校生の部】（敬称略）

氏名（敬称略）	所属
星野 知子 （審査員長）	女優/エッセイスト
宮下 義弘	全国国際教育研究協議会 会長
石井 聡	産経新聞社東京本社 論説委員室 論説委員長
久米 正泰	全日本空輸株式会社 法人販売部 部長
西 健太郎	株式会社スクールパートナーズ高校生新聞事業部 執行役員 編集長
中村 絵乃	特定非営利活動法人 開発教育協会 事務局長
岩切 敏	JICA 国内事業部 部長

【中学生・高校生の部共通】（敬称略）

氏名（敬称略）	所属
小山内 美江子 （名誉審査員長）	脚本家/JHP・学校をつくる会代表理事
増島 稔	外務省 国際協力局 審議官
田中 雅彦	JICA 地球ひろば所長/広報室室長

【後援団体】

外務省、文部科学省、世界銀行東京事務所、全日本中学校長会、全国高等学校長協会、全国国際教育研究協議会、日本私立中学高等学校連合会、読売新聞社、産経新聞社、特定非営利活動法人開発教育協会、日本放送協会、各都道府県及び政令指定都市教育委員会、各都道府県青年海外協力隊 OB 会
--

【協賛団体】

日本航空株式会社、全日本空輸株式会社、株式会社スクールパートナーズ

I-4 海外研修実績

2015年度コンテストの最優秀賞、優秀賞、審査員特別賞受賞生徒を対象に、マレーシア（中学生の部）とベトナム（高校生の部）に研修国を分け、海外研修を実施した。研修参加対象者20名のうち20名（中学生の部10名、高校生の部10名）が研修に参加した。

研修に関する実績は次のとおり。

- 第二回事前研修 日時：2016年7月24日（日） 14：30～21：00
場所：JICA 東京
内容：研修の目的、海外視察の視点
フォトエッセイ講座（報告書の作成について）
健康・安全管理ブリーフィング

- ワークショップ（研修国について学びたい事を整理）
 - 事務連絡
 - 研修国別渡航準備（学校交流準備等）
- 海外研修
 - 日程：マレーシア／ベトナム
 - 2016年7月25日（月）から7月30日（土）まで
 - 参加人数：（マレーシア）12名（同行者1名、添乗員1名含む）
（ベトナム）12名（同行者1名、添乗員1名含む）
 - 同行者：（マレーシア）森山史子（元青年海外協力隊員）
（ベトナム）寺田雄介（元青年海外協力隊員）

I-5 その他イベント等実績

エッセイコンテスト運営のため、以下のイベント等を実施した。

- 表彰式
 - 日時：2017年2月18日（土） 10：30～15：30
 - 場所：JICA 地球ひろば
 - 参加対象者：コンテスト上位入賞者
受賞者同行者
来賓
主催者
 - 参加人数：103名（運営スタッフは除く）
内訳：受賞者32名
同行者52名、来賓者19名
 - 実施内容：表彰式リハーサル
表彰式
懇親会
地球ひろば体験ゾーン見学
地球のステージコンサート
- 海外研修
 - 第一回事前研修
 - 日時：2017年2月19日（日） 9：00～12：00
 - 場所：JICA 東京
 - 参加者：研修対象受賞者16名および同伴者
 - 実施内容：海外研修概要説明
昨年度参加者体験談
研修国事情講座
ワークショップ

II 評価

全国の中学生・高校生に対して、国際協力や開発途上国について考えるきっかけを提供し、開発課題や国際協力への関心を深めることを目的として本コンテストを運営した。運営に際しては、昨年度の実績以上の応募数を獲得すること、国際理解を促すという目的を

推進すること、また応募者、応募校、応募者数などのデータを効率よく管理すること等に留意しながら、事業としての質を向上させることを意識した。実施内容に関する評価は次のとおり。

Ⅱ－１ 募集テーマについて

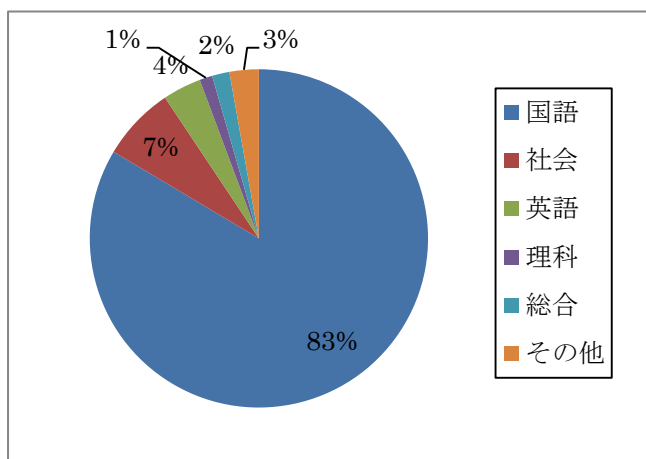
今年度のテーマは「未来の地球のためにー私たち一人一人にできることー」。

「地球」という文言がテーマに含まれているためと考えられるが、地球温暖化などの環境問題に言及した作品が中高生共に非常に多く見られた。作品の舞台も環境問題に絡め、世界全体または身の回りの日本のことを記載したものが多かった。環境問題の次に多かったのは、貧困問題、平和・紛争問題であり、近年テレビで取り上げられている IS のことやバングラデシュでのテロで日本人が犠牲になったことなどに言及しているものがいくつか見られた。中学生は漠然としているテーマが多く、一つのテーマについて深く書かれている作品は少ないが、高校生は自身の体験や JICA のプログラムに参加した等の、具体的な記述が多く見受けられた。

Ⅱ－２ 応募総数と応募者内訳について

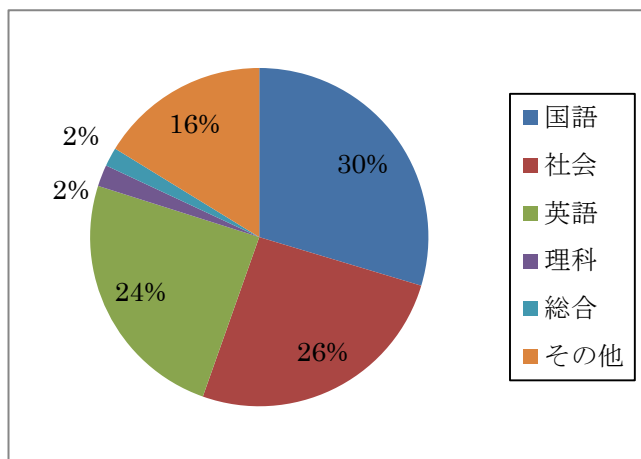
【図表Ⅰ－１】で示されるとおり、中学生、高校生の部共に応募数が昨年度と比較して増加した。応募総数は過去最高の応募数であった。増加理由としては、応募テーマが取り組みやすかったことが第一に考えられる。また、学校応募アンケートより、「国際協力に関するテーマが良い」という回答が目立った。「ニーズに合っている」という回答も見られたことから、SDGs や 2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、各学校の国際理解への取り組みが盛んになっていることが窺えた。

【図表Ⅱ－１ 学校応募担当教員の教科(中学生の部)】



サンプル=1,143

【図表Ⅱ－２ 学校応募担当教員の教科(高校生の部)】

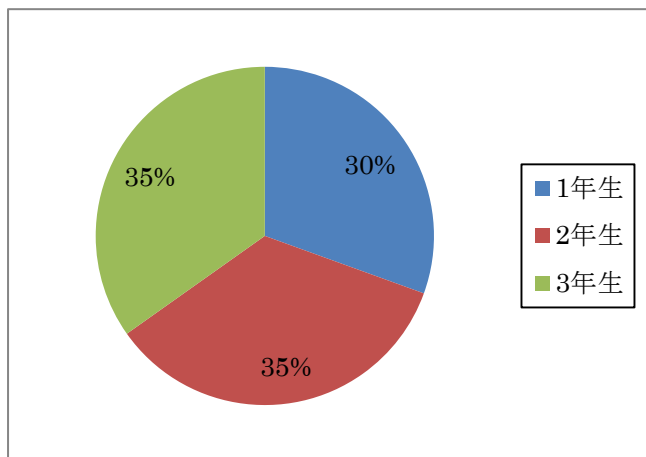


サンプル=388

中学生の部においては、学校応募の担当教諭の担当教科内訳【図表Ⅱ-1】では、国語科が全体の約8割を占めた。高校生の部【図表Ⅱ-2】においても国語科は30%と多数を占めているが、次に多い社会とさほど差がなかった。また、英語科でも取り組まれており、授

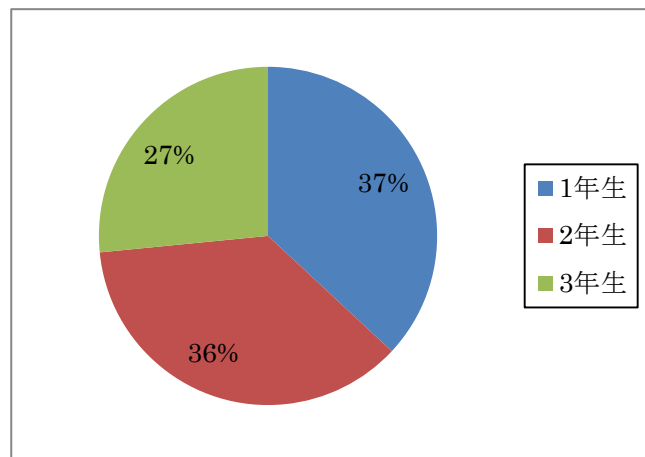
業と関連させ、世界について触れる際に本コンテストが利用されていることや、開発教育の一環として扱われていることが窺える。

【図表Ⅱ-3 学校応募担当教員の担当学年(中学生の部)】



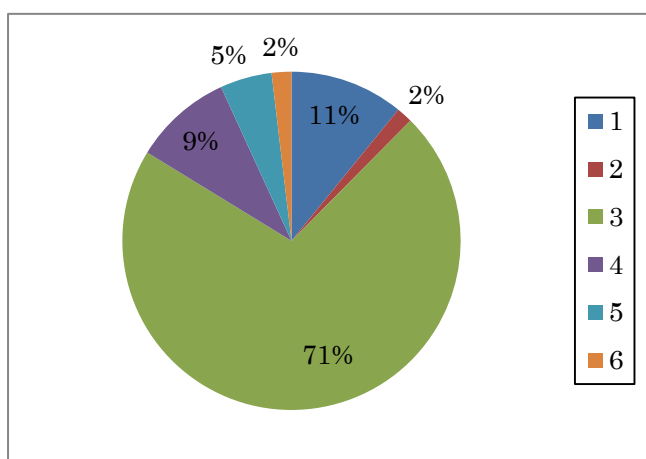
サンプル=1,396

【図表Ⅱ-4 学校応募担当教員の担当学年(高校生の部)】



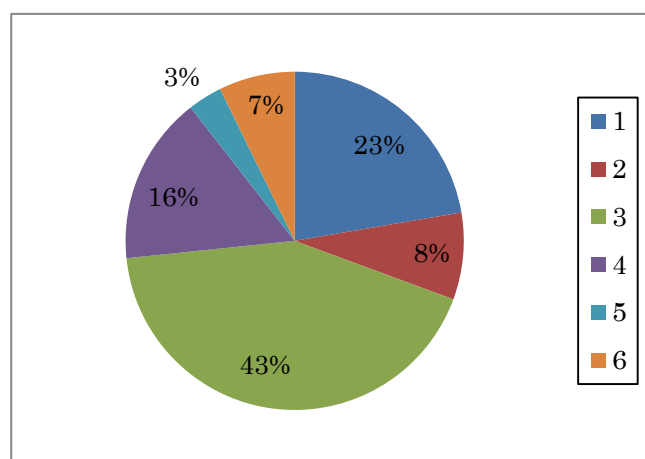
サンプル=482

【図表Ⅱ-5 学校応募担当教員の応募動機(中学生の部)】



サンプル=1,433

【図表Ⅱ-6 学校応募担当教員の応募動機(高校生の部)】



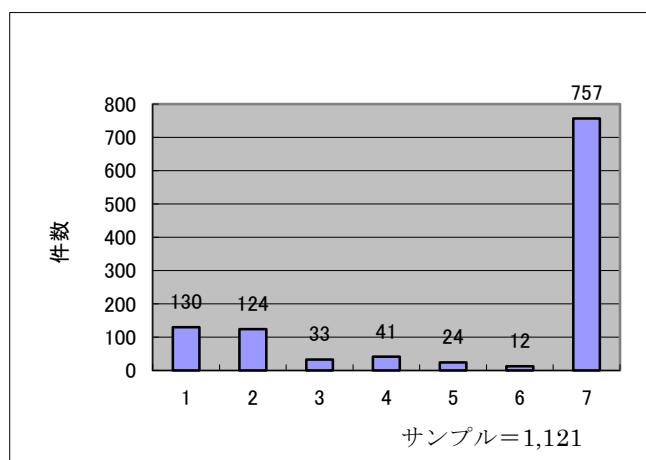
サンプル=578

(項目) 応募動機

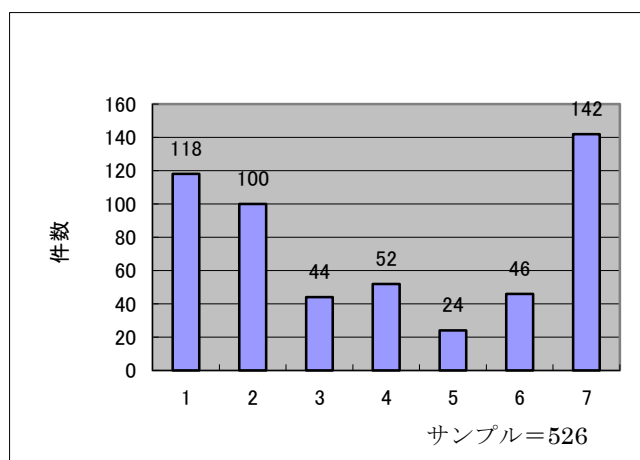
- | | | |
|--------------------------|--------------------|--------------|
| 1. 授業の一環として | 2. 特別活動の一環として | 3. 夏休みの課題として |
| 4. コンテストの趣旨やテーマが興味深かったから | 5. 副賞や参加賞が魅力的だったから | |
| 6. その他 | | |

応募教諭の担当学年内訳【図表Ⅱ-3、図表Ⅱ-4】では、例年通り中高共に1年生から3年生までほぼ均等であった。応募動機【図表Ⅱ-5、図表Ⅱ-6】では、中高共に「夏休みの課題」としての応募が多数を占めた。全ての項目において、昨年度とほぼ変化のない結果となった。

【図表Ⅱ-7 JICAプログラム利用状況(中学生の部)】



【図表Ⅱ-8 JICAプログラム利用状況(高校生の部)】



(項目) JICAプログラムの利用状況

1. 国際協力出前講座
2. JICA 施設訪問
3. 開発教育指導者研修
4. 教師海外研修
5. JICA ボランティア事業
6. その他
7. 上記プログラムを利用したことがない

応募者の JICA プログラム利用状況【図表Ⅱ-7、図表Ⅱ-8】をみると、中学生の部においては、昨年度に比べ「JICA 施設訪問」が微増した(昨年度 96 件、サンプル 1,107)。高校の部では、昨年度に比べ「国際協力出前講座」が微増した(昨年度 110 件、サンプル 532)。一方で、当コンテストの募集要項でも各開発教育支援プログラムを紹介しているにもかかわらず、「プログラムを利用したことがない」が未だ多数を占める結果となった。

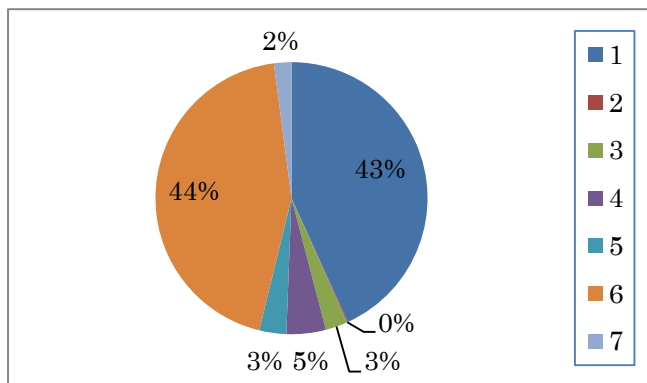
県別応募数では、中学生の部で 1 都道府県(埼玉県 375 減)、高校では 5 都道府県(北海道 604 減、茨城県 384 減、千葉県 347 減、愛知県 624 減、大分県 360 減)となっており、300 作品以上応募数が減少した県が比較的都市部に見られた。一方で、中学の部では北海道 709 増、福島県 566 増、千葉県 606 増、東京都 1,782 増、愛知県 979 増、滋賀県 657 増、京都府 831 増、大阪府 873 増、福岡県 552 増となり、500 作品以上応募数伸ばした県が多数あった。高校生の部では、東京都 313 増、石川県 306 増、京都府 382 増、佐賀県 459 増、沖縄県 661 増と、300 作品以上の増加があった。

Ⅱ－3 周知について

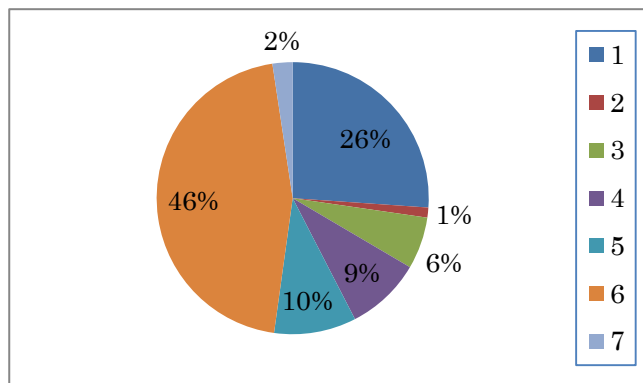
学校応募については全項目において中高共にほぼ同様の結果となった。学校に直接送付している広報媒体の効果及び過去の応募校からの応募が多いと判断できる。

【図表Ⅱ－9 学校応募担当教員の広報媒体(中学生の部)】

【図表Ⅱ－10 学校応募担当教員の広報媒体(高校生の部)】



サンプル=1,496



サンプル=502

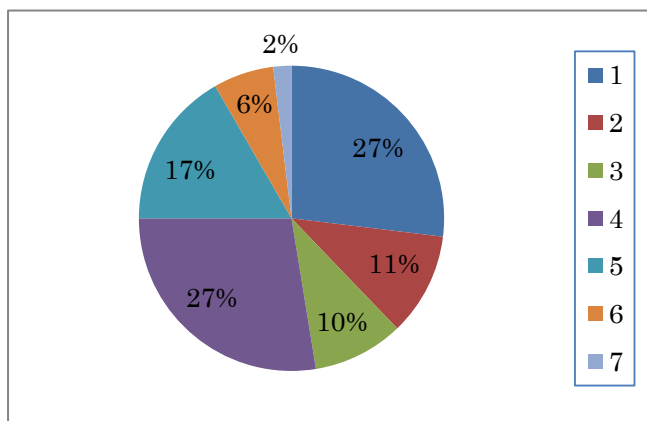
(項目) 広報媒体

1. ポスター、ちらし、優秀作品集を見て
2. 新聞・雑誌を見て
3. インターネットを見て
4. 同僚や上司からの紹介
5. JICA の国際協力出前講座や施設訪問の際に紹介されて
6. 過去に応募したことがあった
7. その他

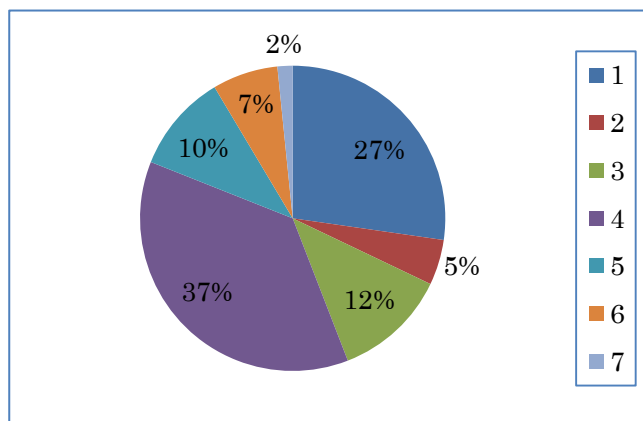
例年同様「ポスター、ちらし、優秀作品集を見て」との回答が中学生の部で43%、高校生の部で26%、また「過去に応募したことがあった」についても、中学生の部43%、高校生の部46%と、多数を占めた。【図表Ⅱ－9、図表Ⅱ－10】。このことから、継続して取り組んでいる教諭からの応募が多いことが考えられる。

【図表Ⅱ－11 個人応募の広報媒体(中学生の部)】

【図表Ⅱ－12 個人応募の広報媒体(高校生の部)】



サンプル=156



サンプル=374

(項目) 広報媒体

1. ポスター・ちらし、優秀作品集を見て
2. 新聞・雑誌を見て
3. インターネットを見て
4. 学校・塾の先生からの紹介
5. 家族・友人・知人の紹介
6. JICA 関係者からの授業や施設訪問の時に紹介されて
7. その他

個人応募では、「ポスター・ちらし、優秀作品集を見て」が中学生の部で27%(昨年度23%)、高校生の部でも27%(昨年度は18%)となり、多数を占めている。「JICA関係者からの授業や施設訪問の時に紹介されて」が中学生の部において、6%(昨年度3%)、高校生の部において、9%(昨年度7%)と増加している。【図表Ⅱ-11、図表Ⅱ-12】。一方「インターネットを見て」は中学生の部で10%(昨年度13%)、高校生の部で12%(昨年度18%)と減少している。

以上